

きしないが、大赤斑は長く続く。巨大なガスの惑星次。に太陽系の起源が簡単に説明される。原始太陽系星雲の回転が速い(角運動量が大きい)と連星系になり、回転が遅いとガスが中心に集まって1つの太陽ができ、惑星がまわりにできる。ガリレオ衛星の紹介: イオの表面と火山の噴火。エウロパ、ガニメデ、カリストの表面。リングの発見。

内容は難しくなくわかりやすい。ただひとつ原始太陽系星雲のできたで、ガスがいきなり分裂して惑星になるようにとれるのが気にかかる。木星は燃えないガスの星にとどまった、というような説明もついている。現在考えられている説では、微惑星からなる芯が中心にあるはずだが、このシーンは短い、太陽系のできたは水星の巻でちゃんと説明しているから、気にするまでもないかもしれない。

『土星——その輪が外惑星の秘密を知っている』

ガリレオが見た土星のリングは耳のような形をしていた。パイオニア 11 号は E, F, G の各リングを発見する。ボイジャー 1 号と 2 号が土星に近づいて、びゅんと通りすぎるかっこいいアニメ。輪の起源の説明では、土星に近づきすぎた天体がこわれて輪のように広がるものと、土星を作った残りの物質が衛星にまとまらず輪にな

ったというアニメが示される。ボイジャーが明らかにしたリングの構造は、とても細い多数のリングからできていた。Bリングのスポーク状の黒い模様。リングの間隙にも細いリングは存在すること。Fリングのねじれ。土星のシマ模様は木星にくらべるとぼけているが、大気の運動は激しい。衛星タイタンの大気と、その大気下の想像図。いろいろな衛星の素顔と簡単な特徴がさっと紹介される。衛星表面にみられるクレーター。

内容は土星や輪や衛星の形と表面についてのもので、難しい部分はなく、文科系の学生でも楽しめるものである。惑星探査の成果を知るのにはちょうど手頃な長さだし、内容もよくできている。

ただひとつ気になることは、土星やリングの擬似カラー写真で、カラーの説明が何もないことである。教科書や科学雑誌でも、何の説明もなく擬似カラーの写真のせていることがあるので、ひょっとしたら、土星や木星はこのように変な色をしていると思こんでいる学生がかなりいるかもしれない。(加藤万里子)

◇ 7月の天文暦 ◇

日	時	分	記	事
2	14	40	月	最近
4	17	17	金星	留
6	8	56	地球	遠日点通過
6	20	36	下弦	
7	0	34	水星	西方最大離角
7	6	33	小暑	(太陽黄経 105°)
14	6	53	朔	
18	9	29	月	最遠
20	2	28	金星	最大光度
22	11	14	上弦	
22	23	51	大暑	(太陽黄経 120°)
26	3	20	冥王星	留
29	12	25	望	
30	16	57	月	最近

1988年4月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	7,	133	11	8,	84	21	5,	82
2	—,	—	12	10,	69	22	5,	58
3	5,	56	13	—,	—	23	6,	30
4	5,	68	14	12,	99	24	3,	8
5	6,	44	15	11,	123	25	5,	20
6	7,	28	16	12,	151	26	4,	30
7	—,	—	17	8,	70	27	2,	21
8	—,	—	18	10,	117	28	4,	29
9	11,	70	19	8,	85	29	—,	—
10	8,	59	20	5,	91	30	4,	56

(相対数月平均値: 81.4)

◇ 7月の日月惑星運行図 ◇

